〈50周年記念号に寄せる〉

忘れ得ぬことを少し――企画三つ，望外三つ

日 高 昭 二

赴任して間もなく人文学研究所の常任委員を仰せつかり，講演係の担当になった。キャンパスを見渡してみると，当時は講演会のポスターなどを掲載する習慣がないとみえて，ずいぶん地味な大学だと思った。

そこで，講演者を選ぶにあたっては，少しにぎやかに，多少大向こうを意識しつつ，いま社会で活躍している人々を対象にすることに決めた。また，講演の対象を，学生向け，教員向け，一般市民向けに分けて立てることにして，まず学生向けには吉本隆明氏を，教員向けには多田道太郎氏をお呼びすることにした。吉本氏の「日本の“いま”」の講演のときは，10号館の階段教室が通路の床に座るまでの学生であふれ，彼らの知りたい欲求に何とか答えられたような気がして安堵したことだった。また，多田氏にお願いした「共同研究とは何か」をテーマとした講演は，共同研究の歴史と現在を問い直す内容で，講演後の所員の皆さんの評判もよかった。

その後，一般市民向けに「世界の都市を歩く」の企画を立て，それぞれの専門分野の教員に担当していただいたのだが，これもまた11号館の大教室が市民で一杯になり，申し込まれた多くの方々をお断りせねばならないという盛況であった。市民の旅行ブームと相まって，参加希望が殺到したと思われるが，教員の日頃の研究の一端を市民に還元するよい機会になったと思う。

時代が違う，といえばそれまでであるが，現在の研究所の講演企画は，だいぶ内向きになっているのではあるまいか。研究所のあるべきイメージは，ひとによってそれぞれ異なるであろうが，そのなかで学生向け，市民向け，教員向けの三つの企画を意識するといったことなども，あるいは研究所の活動の幅を広げることになるのではあるまいか。最近では，東アジアの日本研究所の代表者を一堂に集めたものが，いかにも研究所らしい企画として印象に残っている。さらに，こうした企画の学生版，市民版が考慮されてもいいだろう。企画の継続を，切に願わずにいられない。

望外は三つ。一つは，中国・杭州大学との学術交流への参加で，鈴木陽一さんの奔走の賜であるが，二度にわたる杭州行きの機会を与えられたことは，本当にありがたく望外の幸せであった。杭州大学の日本語専攻の学生さんたちの，早朝における会話訓練の風景は心に沁みたが，また高野繁男さん，中島三千男さんたちとの杭州・西湖の歴史的景観のそぞろ歩きなど，記憶に残る愉しいひとときであった。また，二度めは団長として，堤正典さん，浅山佳郎さん，沢田ゆかりさん，筧敏生さんとご一緒であったが，シンポジムにおける若い方々の力のこもった発表に深く感動したことだった。

もう一つは，学内の共同研究奨励金の助成を受け，プリンストン大学，コロンビア大学の視察に赴いたことも忘れ難い。プリンストン大学では，日本語スタッフによる「日本語教育プログラム」に蒙を開かれ，コロンビア大学では日本関係の図書収集のしくみに圧倒されもした。個人としては，あらかじめ準備をしていた永井荷風『あめりか物語』の舞台を二日にわたって探訪したことが，じつに感銘が深かったが，ハーレムの教会におけるゴスペルソングの美しく演劇的な響きも耳に残っている。プリンストン大学のキャンパスに，愛用の帽子を置き忘れるという思い出（？）も残っているが，至る所で立ち止りがちな老人の私を叱咤激励して，ニューヨークの街々を歩かせてくれた山口ヨシ子さん，村井まや子

さん，鈴木彰さんにはただ感謝あるのみ。さらに，その成果として『表象としての〈日本〉』を刊行できたことも嬉しく，むろんそれはすぐれた論考をお寄せ下さった皆さんのご協力があってのことだが，これまた望外のうちの一つとなった。

それに引きつづいて，鳥越輝昭さんには，イタリア・ヴェネツィアのカ・フォスカリ大学訪問の一員に加えていただいた。須賀敦子『ヴェネツィアの宿』をめぐる散策や，日本に紙幣の印刷技術を伝えたキヨッソーネの博物館も楽しかったが，同行した伊坂青司さん，駒走昭二さんと乗り込んだゴンドラの一夜も忘れ難い。その折りの写真が，私の書斎に飾ってあって，ときどき眺めている。

これら望外のことどもを，あれこれと想起していると，つねに同僚の方々のお世話をいただいたことが胸に浮かぶ。深い感謝とともに，ここに記しておきたい。